はじめての商い（上

昔（七〇歳・十月）のささやかな自慢話です。山旅の足跡・ケルンのように積んで残しておきたいと思い、投稿。

晴れ上がった清秋の神楽坂、毘沙門天・善國寺境内は早朝から期待と不安をはらんだ素人商い人の動きで活気があった。

善國寺は飯田橋駅寄りの坂下からメインストリートの神楽坂通りを二百メートルほど早稲田方面へ上ると左側に在る。

入り口門柱、本堂の柱や貫の朱塗りが鮮やかで街並みにひときわ明るいめりはりを加えている。四百年前に徳川家康公が開基したとされ、多くの来歴を刻む名刹だ。

今日はその境内で市が開かれる。

雑誌「いきいき」（現はるめく）が主宰、「いきいき手づくりフェスタ」と称して読者の中から出店希望者を募った。出品は針と糸による手づくり作品。春に募って夏に出品者が決定、その年の秋十月半ば三十五店がテント張りで一堂に連ねることとなった。

その市に我々夫婦が出店した。愛読者である妻の意気込みで応募し決まったものだ。二日間の催しで我々は二日目の今日一日限りである。出品物は妻が長年趣味で手づくりしてきたレース編みの花瓶敷きやテーブルクロスなど敷物各種。それに出店参加が決まってから精出したペットボトル入れやプチショールなど小物類。

およそ消極性を絵にしたような二人にとって、面識の無い赤の他人を前にして、しかも物を販売するなどという振舞いは、清水の舞台から飛び降りるようなことに違いなかったが、二人とも淡々と用

意し、この日も不思議と落ち着いて準備に集中できていた。
市が開かれる境内は賑わいのある神楽坂通りに直接面している。会場はその一角を割り振られ、我々のたなは境内に入って手前の左隅。遠目の端にあたるので、お客様が流れ来てくれるのか、一抹の不安はあった。
各たなに与えられたスペースはちょうど一坪で、六〇×一八〇センチのテーブルをあてがわれ、使えることになっている。周囲のたなでは一様にそのテーブルを中心に商品を展示したり、別途持ち込んだハンガーなどを動員していた。
ここで我々は、兼ねてから準備していた秘策を用意した。
テーブルは展示台として使わないことにしたのだ。後方にずらして単なる商品置き場にし、広く空いた地面に六〇×一二〇センチの黒い板紙を敷いた。発泡スチロールの板に黒紙を貼ったもの。電車内に持ち込み易く半分ほどに畳んで、この現場で展開し、その上に商品であるレース編みを並べようといった按配である。
その意図は、商品の見栄えが大事と踏んで、白いレース編みが目立つように黒いバックを設けて柄が浮き上がるようにし、且つ見下ろす客の目線から距離ができることで一層見やすく映える筈であると。

その筋の専門家からすれば当たり前の発想だろうが、そこは初めての商いの我々にすれば精一杯の一計であった。
かくして、朝十時のオープンを控えて我々夫婦は記念すべき極めて冒険的な一日となる朝を迎えていた。
そして十時のオープン。
そろそろと客が入り始めた。しかしなかなか当方へはお出でいた

だけない。隣のたなには客が立ち止まってやりとりが始まっている。本来ならここで、客寄せの声掛けが必要であろう。だが、「いらっしゃい！」と云えない。その必要さえ頭に浮かばないから、声も出ない。今はやりのフリーマーケットは売らんかなで構える常連が占める場、それとこれとは場所や構えや客層が違うなどと弁解しても、売るために出店した点では変わらない。しかし我々夫婦は商品を売るという意識より、作品を発表するという気分であったのかも知れない。

やがて落ち着かない面持ちの我々の前に、待望の客いやお客様が近づいて来られて地面の商品ボードを見下ろし、第一声「こんなに安くしていいの？」であったか？とにかく反応があった。

そして、最初に買い上げてくれたのが、パイナップル模様のレース編み、ピンクのプチショールだ。若い女性客であった。何と嬉しいことに、その女性が再び現れて、これを巻いて帰りますと云ってくれたのだ。

これが商いの喜びなるものか！妻のこころに充分沁み込んだひとときとなった。それからは、切れ目無くお客様が訪れてくれるようになった。お客様の立ち位置から見ると、やはり商品の見栄えが良いことにあらためて気付く。

案の定、展示の仕掛けが見事に的中したのだ。

いつしか、地面の商品ボードへの補充が忙しくなって、品物が手渡され交換に手許にお金を頂戴している！売れているのだ！思わぬ展開となっている。「いらっしゃいませ！」の掛け声は相変わらず出ないながらも、会話も交わされている。

（続く）